2022.06.14.
T.Kobayashi

幕張の寺社巡り　続篇
幕張駅北口から武石を歩いて見ると

総武線幕張駅の南側（海側）には、千葉街道以北の旧幕張集落と千葉街道以南の新しい幕張とがある。旧幕張集落には有史以来の様々な歩みの跡が残されており、新しい幕張には海を埋め立てて造ったビジネス街や商業施設や住宅街が広がっている。
一方北口に降りてみると、南口とは全く異なる景観に驚く。まだ赤土が露出した所が多い開発途上の街が広がり、一戸建ての一般住宅が並んでいる。高層ビルが少ないせいか、圧迫感がないし、遠望が効くので風景を楽しむことができる。出来たばかりの住宅街のさらに奥の方に海抜 20ｍほどの高台が広がっているのが見え、幕張という土地はどんな地形なのかがよくわかる。

＜1＞ 三代王神社

幕張駅北口を出て､北東に向かって 10 分ほど歩くと京葉道路の武石 IC に通じる県道 57 号線に出る。平坦地はここまでで、ここから上り坂が始まる。
上り坂が始まる地点にある緑の塊のような山は、どこから見ても目立つシンボルのような存在。
山の南面に鳥居が建ち､「三代王神社」の標識がある。鬱蒼と茂る山の膨らみに刻まれている急勾配の石段を 70 段上ると神社の境内に入る。
かなり広く平坦な境内には、本殿のほかに神楽殿や八坂神社・琴平神社などの境内末社がいくつか配されている。一人の老人が無心に草取りと落ち葉掃きをしているほかには参拝者もいなく人の気配はない。神社の由来を書いた看板が建っているわけでもないし、伝承を書いた石板が建っているわけでもない。ここに来ただけでは何ひとつわかるものがないという不思議な神社だ。
国土地理院の地形図によれば、ここは海抜 20.4ｍで、三等三角点がある。屋敷や大久保の方からせり出した稜線が海に向かって落ちる所で、見晴しはなかなか素晴らしい。海浜の埋め立てが進み、今では海岸線の認識すら難しくなってしまったが、見下ろす幕張駅の少し先は、50 年前までは海だった。さらに遡って 1000 年以上の昔には、この山の真下まで海が迫っていたに違いない。
三代王神社は、武石に居城または居館を持っていた千葉三郎胤盛が 1202 年（建仁 2 年）に、郷中の守護神として明神を勧請して「武石明神」として祀ったのが始まりと言われている。居館はこの山の東端、花見川を見下ろすところにあったようだが、詳細はわからないらしい。
のちに千葉氏 14 代当主である満胤の次男馬加康胤（まくわりやすたね）が、千葉氏宗家の胤直を滅ぼして 19 代当主の座を手に入れた。馬加城に住んでいた康胤は、1445 年（文安 2 年）に奥方の安産を祈願して武石明神に本社を造営し、家臣の小川采女を祭司に任じた。
康胤は、1456 年（康正 2 年）に一族である東常縁に敗れて自害し、小川采女も命を落とし、神社の名称は「三代王神社」と改称された。
その後江戸時代に武石明神の名に戻った時期もあったが、1757 年（宝暦 7 年）に小川采女の子孫を社人に起用して、再び三代王神社を名乗るようになった。
神社は南（海）を向いて建っているので、海（漁師・船）の守り神でもあったと考えられる。
「三代王」という呼称の持つ意味も気になるところだが、どこを調べてもわからなかった。

＜2＞ 真蔵院と武石城

三代王神社を出て、高台へ上がっていく道を進むと右側に千葉西税務署がある。税務署の北側を大きく迂回するように右回りにまわると花見川に向かって坂を下る。坂を下りきった集落の中に、山を背にして真蔵院が建っている。この間徒歩 15 分足らずの行程。
正式名称は真言宗豊山派の真蔵院迦羅陀山三会寺で、駅南口にある宝幢寺の末寺として同時期に出現

した寺とのことだった。武石の高台の東麓にあり、花見川まではもう僅かな距離。見越しの松が出迎えてくれる粋な寺は、創建時期は定かでないらしいが、806 年(大同元年)に興行大師の開基と伝えられており、元禄年間に観海上人により中興されている。
1197 年（建久 8 年）に千葉三郎胤盛が母の菩提を弔うために祀った柳地蔵菩薩を本尊として堂宇を建立したという言い伝えがある。また境内の一段高い所にある波切不動堂は、胤盛の曽孫である長胤が 1259 年（正治元年）に、胤盛の守り本尊だった不動尊を本尊として祀った。波切不動は武石・幕張・検見川あたりの漁師・船頭などの信仰を得ていた。
不動堂の右手に付けられた細い石段が、さらに上があることを知らせてくれた。頂上の少し手前に古い墓石が立ち並ぶ墓地があった。墓地の脇の小道をさらに上っていくと、草に覆われてしまってはいるが平坦地が広がっていた。国土地理院の地形図で確認すると、三代王神社とほぼ同じくらいの海抜 20ｍの見晴しの良い高台の先端という感じがする。
千葉常胤が源頼朝の鎌倉幕府設立にあたり功を上げて得た所領を６人の息子に分け与えたのが 1180 年（治承４年）頃と考えられるので、千葉三郎胤盛が武石に居を構えたのもこの時期と考えられる。
武石城の存在を記す情報があるが、具体的な場所は確認されていないらしい。真蔵院の場所に居館があったとする情報が有力のようだが、遺構も見つからず確たる証はないようである。
この山頂の広い平坦地に居城または居館があったのかもしれない。

＜3＞ 武石神社

京葉道路武石 IC の南面千葉側に武石神社がある。集落の間の込み入った里道を進むと荒れた畑に飛び出した。畑の中の細い道を進むと、京葉道路を背にした篠竹の茂った小さな膨らみと鳥居が見えてきた。真東に向いた立派すぎるような鳥居に圧倒されて進んでみると、鳥居の左側には説明の看板も建っており、小さい境内ではあるが境内末社の三峰神社も立派な構えをしていた。創建年代は不詳とされている。
1538 年(天文 7 年)に国府台合戦で武石胤親が討ち死にしたことで武石氏は消滅した。その後里見に残っていた武石氏の末裔達の手によって代々の神霊が祀られたことが境内の石板に示されていた。
説明看板によれば、祭神は「おたけし様」「おたけ様」として崇められていたとのこと。
千葉六党の三男千葉三郎は、武石郷を所領していたことから「武石三郎」を名乗った。つまり、千葉氏の登場以前に「武石」という郷（地名）が存在していた。古い文献の記述によると、昔は「たけいし」とは読まず「たけし」と読んだらしい。
「武石」という地名の起源が気になるところではあるが、殆どの資料や情報が千葉氏発生前後からしか語っておらず、残念ながらそれより昔の情報に辿り着くことができず、地名の起源・由来はわからなかった。
時折京葉道路を走る大型トラックの轟音や、畑の小道で語る二人の老婆のお喋りが聞こえる、のどかな神社だった。

＜4＞ 猿田神社

花見川の岸から少し奥に入った、武石町と幕張町の境界にある住宅地の一角に猿田神社がある。
きれいに手入れされている神社で、時折近所に住んでいると思しき老婆が拝みに来ていた。小さな堂宇には「庚申塔」と書いた石板と青面金剛王を彫り込んだ小さな石塔が建っていた。
神社を出て南東に向かうと、花見川の西岸なのに東岸と同じ「浪花町」という町名表示になっていて、川岸より一本西側に弓形にカーブした道が走り、大きな緑地が川岸に迫っていた。おそらく大昔花見川が河口近くで蛇行していたことの名残と考えられる。

＜5＞ 馬加城

馬加城は千葉常胤の四男の胤信（大須賀四郎胤信）によって 1180 年（治承４年）に建てられたと記録が残っている。室町時代になって千葉満胤の次男である馬加康胤が居城とした。
のちに足利幕府内の内紛が千葉氏にも影響し、康胤は甥である千葉胤直を焼き討ちにして千葉宗家の

座を手にしたが、足利義政の命を受けた東常縁（千葉六党の一人千葉六郎の末裔）に追われて市原で自刃。末裔同士の骨肉の争いにより千葉家は崩壊した。

（参考情報：幕張「首塚」　http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/makuhari.pdf　）

馬加城の廃城時期は定かでないが、戦国時代にも使われていたらしい。三代王神社の北西に位置する地続きの高台にあったが、現在は幕張 PA に隣接する「幕張ハウス」という大きなマンションが建っていて、遺構の類いは残されてはいないらしい。（Yahoo 地図　https://yahoo.jp/qkkS-1　）

あとがき

近くの小さな旅をまとめてみたら、千葉氏の名前が随所に登場することになった。家督相続する人は親の名前の一文字を折り込んだ名前の人が多いので、登場人物の名前が似ていてわかりにくい上に、親子・兄弟・親戚などの関係や時代的なつながりが理解しにくい。

やむなく、「桓武平氏」の流れである千葉氏の系図とその中で「千葉六党」と言われた千葉家の六人兄弟の系図を調べてみた。

ページ数が多くなる関係で、別文書（別ファイル）としたので参照下さい。

以上

＊参考資料

「千葉さんの家系図調査」　http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/chibasan.pdf